

「被爆体験の継承」と広島市行政による「平和」の施策の展開

——集合的経験にもとづく価値の形成とその制度化——

一橋大学 根本雅也

1 背景と目的

本報告の目的は、広島における「被爆体験の継承」という理念の形成過程を歴史的に辿り、その背景にある価値と広島市行政との関わりを探ることにある。

現在、被爆地である広島市や長崎市を中心に「被爆体験の継承」の重要性が唱えられている。「原爆の『被爆体験』は継承されなければならない」という考えにもとづいて、行政や諸団体が、記録や関係史資料の収集・保存、あるいは平和教育という形で関連する施策や活動を行ってきた。これまで、こうした「被爆体験の継承」という理念と実践に関して、「何を継承するのか（すべきか）」「どのように継承するか（すべきか）」について問われ、議論が重ねられてきた。しかし、一方で、なぜ「被爆体験の継承」という理念が生まれたのか、それがどのような価値から構成され、どのように組織や人びとに影響を及ぼしてきたのかについてはあまり検討されてこなかった。つまり、「被爆体験の継承」という理念や取り組みの背後にある（社会的な）価値や規範的側面、そしてそれらをめぐるポリティクスは、ほとんど注目されてこなかったといえるだろう。そこで、本報告は、「被爆体験の継承」という理念と取り組みがどのような価値を背景に生まれてきたのかを歴史的に探るとともに、こうした価値と広島市行政による「平和」の取り組みの関係性について検討する。

2 方法

以上の目的を達成するため、本報告は、広島市（地域）を対象とし、「被爆体験の継承」が叫ばれ始めた1960年代後半という時期に主に焦点を当てて次の二点を検討する。まず、「被爆体験の継承」にまつわる価値を明らかにするため、「被爆体験の継承」という理念と実践の形成過程を辿る。次に、本報告は、「被爆体験の継承」にまつわる価値と市行政の関わりを探るため、1960年代後半以降に広島市行政が展開した「平和」に関する施策の背景や特徴について検討する。

なお、本報告の内容は、広島市行政や関係者、社会運動団体やそこに関わる個人が記した文書資料（一次資料）の整理と分析にもとづいている。

3 結論

広島市では、1960年代後半に「被爆体験の継承」という理念と取り組みが生まれた。この背景には、広島における社会運動団体・個人において、原爆の「被爆体験」が、被爆者の抱える諸問題を指すだけでなく、「人類にとっての貴重な教訓」という価値あるものとして捉えられたこと、また「被爆国」ではなく「被爆地」の経験であるという地域性が強調されたこと、そしてこの経験にもとづく核兵器反対の主張が、国や政党といったいかなる政治的立場をも超えた人道主義的立場（超政治的立場）であると捉えられたことがあった。これらの価値は、「被爆体験の継承」に取り組み担い手として、互いに対立する社会運動の諸団体ではなく、広島市行政の台頭へとつながり、その影響力を拡大させていくことになったと論じる。